

# 上代人の空間意識 —サト(里)・ノ(野)・ヤマ(山)・ハラ(原)・ヲカ(丘)について

白 井 清 子

キーワード：空間意識、サト(里)、ノ(野)、ヤマ(山)、ハラ(原)、ヲカ(丘)  
要旨

上代の人々は、サト(里)を中心にして、その周囲にノ(野)があり、さらにその外側にヤマ(山)があると意識していた。ハラ(原)とヲカ(丘)はその構造に直接には関わりがない。ハラは一面に同じ状態で漠として広がった平面をさす。ヲカはヤマとは高さの違いだけでなく、主としてノにあるという位置の違いがある。

## はじめに

上代語の意味を調べていて、ノ(野)とハラ(原)の違いは何なのか、ヤマ(山)とヲカ(丘)の違いは何なのかと、地形・空間をあらわす基礎語をいくつかさぐっているうちに、次第に上代の人々が意識していた空間のとらえ方が浮かびあがってきた。それは、今まで多くの研究者がノ・ハラ・ヤマ・ヲカ・サトなどの個々の語について述べてきたこととかさなることももちろんあるけれども、しかし、一つ、あるいは二つ程度の語について個々に考えていたのでは、実はこれらの語は解明できない。これらの語は構造的に把握すべきものと思われる。今回は、空間意識を示すものとしてサト(里)・ノ(野)・ヤマ(山)・ハラ(原)・ヲカ(丘)の五つをとりあげて考える。

(なお、用例は、日本古典文学大系『古代歌謡集』『万葉集』による。万葉集の用例は巻数・歌番号のみ記す。原文の表記は〔 〕で示す)

## I. ノ(野)とサト(里)

ノはサトと対立的に使われている例がある。

- 1 ま遠くの野(野)にも逢はなむ心なく 里(佐刀)の真中(みなか)に逢へる背なかも

〈14・3463〉

人家から離れたノであれば人目を気にせずにすむのに、人家のあるサトだから人目が気になる。だから、サトではなくノで逢いたかったのである。

2 見渡せば近き里廻(さとみ)〔里廻〕をたもとほり今そわが来る礼巾(ひれ)振りし野(野)に 〈7・1243〉

この二つの歌からわかるように、人は通常サトで生活していて、そこから時折ノに出かけていく。ノは常に居るところではなく、なにかのときに出かけていく所である。

## II. ノ(野)とヤマ(山)

一方、ノはヤマとも対立的に使われている。

3 あしひきの山(山)にも野(野)にも御狩人(みかりびと)得物矢(さつや)手挟み散動(さわ)きたり見ゆ 〈6・927〉

4 卯の花の散らまく惜しみほととぎす野(野)に出(で)山(山)に入り来鳴き響(とよも)す 〈10・1957〉

これによると、ノとヤマは接している。そこで、これだけをみていると、柳田国男のいう「野は山の裾野の傾斜地<sup>(注1)</sup>」という考えもあたっているように思われる。しかし、前述のようにノはサトとも対立するものであり、山の裾野の傾斜地とだけ限定することには無理がある。

ノはサトとも対立し、ヤマとも対立するからといって、すぐにサト・ノ・ヤマが同じ基準で分けられていると判断することはできない。では、ノのどういう点がサトと対立するものとして捉えられているのか、ノのどういう点がヤマと対立するものとして捉えられているのかをさぐるため、サト、ヤマの意味をまず確認しておきたい。

## III. サト(里)

(1)サトは人家が集落をなしている地であった。さきの用例1の3463番もこのサトの例であるので、再度掲げておく。

1 ま遠くの野(野)にも逢はなむ心なく里(佐刀)の真中(みなか)に逢へる背なかも 〈14・3463〉

このほかにも次のような例がある。

5 ますらをの高円山(たかまとやま)〔高円山〕に迫(せ)めたれば里(里)に下りけるむざさび(ママ)そこれ 〈6・1028〉

普通ならば人家のあるサトにむざさびが現れることはないのである。

- 6 ことしげき里〔里〕に住まずは今朝鳴きし雁にたぐひていなましものを  
〈8・1515〉

(2)サトは生活、生存の拠点となっている所であった。

- 7 天飛ぶや 軽の路は 吾妹子が 里〔里〕にしあれば ねもころに 見まく  
欲しけど 止まず行かば 人目を多み まねく行かば 人知りぬべみ……  
〈2・207〉

- 8 春されば吾家(わぎへ)の里〔佐刀〕の川門(かわと)には鮎子さ走る君待ちが  
てに  
〈5・859〉

- 9 里〔佐刀〕近く君がなりなば恋ひめやととな思ひし吾(あれ)そ悔しき  
〈17・3939〉

9のサトは自分の住んでいる所、生活している所で、そのサト近くにあなたがおいでになったら私は恋に苦しむことなどはあるまいとわけもなく思っていたが、そんな自分が後悔されるというのである。

(3)サトが生活の拠点であったからこそ、そこを離れた場合には、サトはかつて住んでいた所、自分が生まれ育った土地を意味し、また、旅に出たときにはあとに残してきたわが家を意味するようになる。

- 10 (浦島ノ子ヲ詠ンダ歌)……墨吉(すみのえ)に 帰り来たりて 家見れど  
家も見かねて 里〔里〕見れど 里〔里〕も見かねて……  
〈9・1740〉

- 11 里〔里〕離れ遠くあらなくに草枕旅とし思へばなほ恋ひにけり  
〈12・3134〉

#### IV. ヤマ(山)

ヤマは複合語を含めると、万葉集だけでも九百余例あるが、その主な用法には次のようなものがある。

(1)高くそびえている所として

- 12 倉橋の山〔山〕を高みか夜隠りに出で来る月の片待ち難き  
〈9・1763〉  
13 山〔山〕高み谷辺にはへる玉かづら絶ゆる時なく見むよしもかも  
〈11・2775〉

(2)神が降下する所、神がいます所として

- 14 天降(あも)りつく 天の芳来山(かぐやま)〔芳来山〕…… <3・257>  
 15 鶏が鳴く 東の国に 高山は 多(さは)にあれども 朋神(ふたかみ)の  
貴き山〔山〕の 並み立ちの 見が欲し山と 神代より 人の言ひ継ぎ…  
 <3・382>  
 16 ……この山〔山〕を 領(うしは)く神の…… <9・1759>  
 17 立山〔多知夜麻〕に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神(かむ)からなら  
し <9・1759>

(3)国見をする所として

- 18 大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山〔香具山〕 登り立ち 国  
見をすれば…… <1・2>  
 19 ……朋神(ふたかみ)の 貴き山の 並み立ちの 見が欲し山と 神代より  
 人の言ひ継ぎ 国見する 筑波の山〔築羽乃山〕を…… <3・382>

(4)墓所として

- 20 うつそみの人にある我や明日よりは 二上山〔二上山〕を弟背(いろせ)と我が  
見む <2・165>  
 21 ……大鳥の 羽易(はがひ)の山〔羽貝乃山〕に 我が恋ふる 妹はいますと  
 人の言へば…… <2・210>  
 22 家離(さか)りいます我妹を留めかね山〔山〕隠しつれこころどもなし  
 <3・471>

(5)境となる所、越えると別の世界になる境界として

- 23 ……そらにみつ 大和を置きて あをによし 奈良山〔平山〕を越え…  
 <1・29>  
 24 二人行けど行き過ぎがたき秋山〔秋山〕をいかにか君がひとり越ゆらむ  
 <2・106>  
 25 ……玉藻なす 寄り寝し妹を 露霜の 置きてし来れば この道の 八十  
 限ごとに 万たび かへり見すれど いや遠に 里は離りぬ いや高に 山  
〔山〕も越え来ぬ 夏草の 思ひ萎へて 偲ふらむ 妹が門見む 靡けこの山  
 <3・131>  
 26 岩が根のこごしき山〔山〕を越えかねて音には泣くとも色に出でめやも  
 <3・301>

(6) 獵をする所として

27 梓弓 手に取り持ちて ますらをの 得物矢(さつや)手挟み 立ち向かふ  
高円山(高円山)に…… <2・230>

28 むささびは木末(こぬれ)求むとあしひきの山〔山〕の獵男(さつを)にあひに  
けるかも <3・267>

さきに挙げた用例 3 の 927 番の歌もこの例である。

3 あしひきの山〔山〕にも野〔野〕にも御狩人(みかりびと)得物矢(さつや)手挟  
み散動(さわ)きたり見ゆ <6・927>

(7) 木を伐り、材を得る所として、またそのために標結う所として

29 ……石(いは)走る 淡海(あふみ)の国の 衣手の 田上山(たなかみやま)  
〔田上山〕の 真木さく 檜のつまでを もののふの 八十字治川に玉藻なす  
浮かべ流せれ…… <1・50>

30 ささ浪の大山守は誰がためか山〔山〕に標結ふ君もあらなくに <2・154>

31 鳥総(とぶさ)立て足柄山〔足柄山〕に船木伐り木に伐り行きつあたら船木を  
<3・391>

(8) 木が茂り、植物が生育する所、鳥の栖む所として

32 玉くしげみむろの山〔山〕のさなかづら…… <2・94>

33 あしひきの山〔山〕に生ひたる菅の根の…… <4・580>

34 鹿背(かせ)の山〔山〕木立を茂み朝さらず来鳴き響もす鶯の声  
<6・1057>

ヤマ(山)は平地よりも著しく高くそびえた所として捉えられているばかりでなく、そこは神の降りてくる所であり、人を葬る所でもあった。そして、そこを越えると全く別の世界になってしまう境でもあった。したがって、そこは通常、人の立ち入らない所であった。ヤマには狩獵や木の伐採などの目的で入ることはあったが、それは特別なことであり、ヤマは人にとって事情のよくわからない所と意識されていた。

V. ノ(野)

(1) ノはヤマよりも人家に近い所にあった。

35 ……嬢子(をとめ)の 寝(な)すな板戸を 押そぶらひ 我が立たせれば……

青山に 鶴(ぬえ)は鳴きぬ さ野(怒)つ鳥 雉(きぎし)は響(とよ)む 庭つ鳥  
鶏(かけ)は鳴く…… 〈記歌謡2〉

この例ではヤマ・ノ・ニハ(庭)と並べられているが、ニハはある目的のために使われる平らな地面で、多くの場合、作業場であるから、人々の生活する所すなわち、サトにある。

36 山科の石田の小野(小野)のははそ原見つつか君が山路越ゆらむ  
〈9・1730〉

37 ……玉梓の 道に出で立ち 岩根踏み 山越え野(野)行き 都辺に 参み  
し我が背を…… 〈18・4116〉

(2)ノはサトの周囲に位置する。

38 ……野(野)つ鳥 雉は響む 家つ鳥 鶏も鳴く…… 〈13・3310〉

39 この里は継ぎて霜や置く夏の野(野)に我が見し草はもみちたりけり  
〈19・4268〉

ききにあげた用例2の1243番の歌もサトの外側にノがあることを示している。

2 見渡せば近き里廻(さとみ)(里廻)をたもとほり今そわが来る礼巾(ひれ)振りし野(野)に  
〈7・1243〉

ノは、位置としては、日常の生活圏であるサトの外や周囲にある。ヤマはサトからみると、ノよりも更に遠いところにある。すなわち、ノはサトとヤマの間にある。ノは、サトに対しては自然のままの地、ヤマに対しては平地や緩やかな斜面の地として捉えられることが多いが、その地形の区別は第一義的なものではなく、その生活との関連を中心とした位置の捉え方が第一である。人はサトに住み、ときどきノに出かけていく。ノで何をするか、何のためにノに出かけていくかを分類してみると、次のようになる。

(3-1) 草を刈ったり、若菜や摘んだり、花を見たりする。これが、ノに出かける、もっとも一般的な場合である。

40 いざ 吾妹(あぎ) 野(怒)に蒜(ひる)摘みに 蒜摘みに 我がゆく道に……  
〈日本書紀歌謡35〉

41 真草刈る荒野(荒野)にはあれど黄葉(もみちば)の過ぎにし君が形見とそ来し  
〈1・47〉

42 つくま野(託馬野)に生ふる紫草(むらさき)衣に染め…… 〈3・395〉

- 43 ……ささらの小野(小野)の 七相菅(ななふすげ) 手に取り持ちて…  
 <3・420>
- 44 春の野(野)にすみれ摘みにと来しわれそ野をなつかしみ一夜寝にける  
 <8・1424>
- 45 国栖(くにす)らが春菜摘むらむ司馬の野(野)のしばしば君を思ふこのころ  
 <10・1919>
- 46 秋風は涼しくなりぬ馬並めていざ野(野)に行かな萩の花見に  
 <10・21031>

(3-2) 標(しめ)を結う

- 47 はふ葛(くず)の絶えず偲はむ大君の見(め)しし野辺(野辺)には標(しめ)結ふべしも  
 <20・4509>
- 48 葛城の高間の草野(草野)早知りて標ささましを今そ悔しき <7・1337>
- 49 うち延へて 思ひし小野(小野)は 遠からぬ その里人の 標結ふと 聞きてし日より……  
 <13・3272>

(3-3) 仮寝する

- 50 木綿畳(ゆふたたみ)手向けの山を今日越えていづれの野辺(野辺)に廬(いほり)せむわれ  
 <6・1017>
- 51 いづくにか我は宿らむ高島の勝野の原(勝野原)にこの日暮れなば  
 <3・275>
- 52 印南野(不欲見野)の浅茅押しなべき寝る夜の長くしあれば家し偲はゆ  
 <6・940>

(3-4) 狩りに行く

- 53 春日野(春日野)の藤は散りにて何をかも御狩の人の折りてかざさむ  
 <10・1974>
- 54 梓弓末の原野(腹野)に鷹狩(とがり)する君が弓弦(ゆづる)の絶えむと思へや  
 <11・2638>
- 55 御狩する雁羽の小野(小野)の樵柴(ならしば)の馴れはまさらず恋こそまされ  
 <12・3048>
- 56 つむが野(都武賀野)に鈴が音(おと)聞こゆ上志太(かむしだ)の殿の仲子(なかし)し鷹狩すらしも  
 <14・3438>

- 57 等夜(とや)の野(野)に兎(をさぎ)ねらはり…… <14・3529>  
 58 矢形尾の鷹を手に据ゑ三島野〔美之麻野〕に獵らぬ日まねく月そ経にける <17・4012>  
 59 手束(たつか)弓手に取り持ちて朝狩りに君は立たしぬ棚倉の野(野)に <19・4257>

(3-5) 葬送をおこなう

- 60 ……かぎろひの 燃ゆる荒野〔荒野〕に 白栲(しろたへ)の 天領巾隠(あまひれがく)り 鳥じもの 朝立ちいまして 入り日なす 隠りにしかば…… <2・210>  
 61 天離る鄙の荒野〔荒野〕に君を置きて思ひつつあれば生けるともなし <2・227>  
 62 あきつ野〔蜻野〕を人の(ロニ)懸くれば朝蒔きし(散骨シタ)君が思ほえて嘆きは止まず <7・1405>

以上の例からわかるように、ノは特定の地形に限定できない<sup>(注2)</sup>。ノはサトとヤマの間にあり、サトに住む人々にとって、サトほど日常的な所ではないが、かといってヤマほど縁遠くもない所であった。

万葉集などで、サト、ノ、ヤマに存在する動物、植物を整理し表に掲げてみる。共通して出てくるものもあるが、全体的にはそれぞれの特徴が感じとられるであろう。

動物

植物

|    |             |                       |          |
|----|-------------|-----------------------|----------|
| サト | かわず 鮎 鶏(かけ) | 子水葱(こなぎ)              | 早稲 女郎花 萩 |
|    | 千鳥 ほととぎす    | 橘 梅 松                 |          |
| ノ  | ひぐらし 鶯      | 粟 嫁菜 くくたち(春菜)         | うけら すみれ  |
|    | ほととぎす 貌鳥    | かお花 かきつばた なでしこ        | 女郎花 萩    |
|    | 鴨 もず 鶉 雉    | 紫草 姫百合 卵の花 橘 桜 合歡     | 山吹       |
|    | 兎 鹿 獣       | 藤 榛 児手柏 白つつじ 榛柴(ならしば) |          |
|    |             | 松 杉 しの かや すすき つた くず   |          |
|    |             | すげ 七草の花               |          |



ヤマ 鶯 ほととぎす あじ 春菜 山ぢさ 萩 卯の花 山藍 山吹 山橘  
雁 白鳥 呼子鳥 白つつじ 馬酔木 山椿 真木 檀 桜 小松  
むささび 鹿 柘(つみ) 麻 木綿 笹 はだすすき  
さなかずら くず すげ

## VI. ハラ(原)

サト・ノ・ヤマなどに関連させて今までに出されているハラについての説ではどれもハラを統一的に説明できているものはない。<sup>(注3)</sup>

ハラを構成要素に含む主な語を分類してみる。

植物名+ハラ これが一番多い。樹木、草ともにある。

アサシノハラ(浅小竹原) アサヂハラ(浅茅原) アシハラ(葦原) カヤハラ(草原) シノハラ(篠原) スガハラ(菅原) ハギハラ(萩原) フヂハラ(藤原) マクズハラ(真葛原) イツシバハラ(巖柴原) カシハラ(榲原) スギハラ(杉原) ハリハラ(榛原) ヒハラ(檜原)

形容語+ハラ オホハラ(大原) キヨミハラ(淨御原)

その他+ハラ アマノハラ(天の原) イナミクニハラ(印南国原) ウナハラ(海原) カハラ(川原) オホミノハラ(大海原) タカノハラ(高野原) イホハラ(庵原) ツユハラ(露原) ハラノ(原野)

これらの語から抽出できる共通点は、一面に広がった平面ということである。すなわち、ハラは、ノやヤマとの関連で捉えられる或る地域をさすのではなく一面におなじ状態で漠として広がった平面という、状態を表すことが中心の語と考えられる。地上の空間だけでなくアマノハラやウナハラのように空や海についてもハラと表現できること、ツユハラのように、露の一面に広がっている所と解釈できる語のあること、ノやサトと共に使われることがあることなどからもそのことが裏づけられる。

ツユハラ(露原)の例

63 朝戸出(あさとで)の君が脚結(あゆひ)を濡らす露原(露原)つとに起き出で  
つつわれも裳裾濡らさな <11・2357 旋頭歌>

タカノハラ(高野原)の例

64 秋さらば今も見ること妻恋ひに鹿鳴かむ山そ高野原(高野原)の上  
<1・84>

ノ、サトと共に出てくる例

65 大夫(ますらを)の呼び立てしかばさを鹿の胸分け行かむ秋野萩原(安伎野

66 大き海の海底深く思ひつつ裳引きならしし菅原の里[須賀波良能佐刀]

&lt;20・4491&gt;

ハラはノともサトとも同時に使われうる。ノにもハラがありうるし、サトにもハラがありうる。したがってノやサトとは意味領域の基準が異なる。地域、地形というより空間的状态、すなわち平らに同じ状態が一面に広がっている所をハラという。

したがって、植物名+ハラのような場合、例えばスギハラは「杉の生えている所」ではなく「杉が一面に広がっている所」であり、アシハラは「葦の生えている所」ではなく、「葦が一面に広がっている所」である。これらの語を、「<sup>(注4)</sup>フ(例えば「菅生」など)と関連させてとらえようとする説もあるが、「フ」と「~ハラ」とでは捉え方が異なる。

## VII. ヲカ(岡)

(1)ヲカは自分の住む領域の比較的近く、主として野にある小高い所を意味する。

67 わが岡[岳]にさ男鹿来鳴く初萩の花婦(はなづま)問ひに来鳴くさ男鹿

&lt;8・1541&gt;

68 ふるさとの奈良思の岳[岳]のほととぎす言告げやりしいかに告げきや

&lt;8・1506&gt;

(2)ヲカは雑穀や草を刈り取る所でもあった。

69 この岡[岡]に草刈る小子(わらは)然(しか)な刈りそね在りつつも君が来まさば御馬草(みまくさ)にせむ

&lt;7・1291&gt;

70 左奈都良の岡[乎可]に粟蒔きかなしきが駒はたぐとも吾(わ)はそと追(も)はじ

&lt;14・3451&gt;

ヲカにある動植物として表現されているものは、雁・鳥・ほととぎす・鹿・草・梅・松・萩・なでしこ・卯の花・葛・藤・くくみら(韭)・粟・萱などで前述したノの動植物と共通するものが一番多い。

ヤマは「我がヤマ」と表現することはないが、ヲカは「我がヲカ」「このヲカ」と、自分の側に属する領域、生活圏内にあるものとして表現することがある。したがって、ヲカはヤマより低い所という捉え方だけでは十分でなく、その位置するところがヤマとは異なることに留意する必要がある。<sup>(注5)</sup>

## まとめ

サト(里)は、人が育ち、生活し、生きる基盤となっている所である。そのサトを中心として、その周囲にノ(野)がある。ノは、ほとんど人の手が加わっていない自然のままの地であり、平地の場合もあれば、緩い傾斜地の場合もある。ノは人々が時折、草を刈ったり、若菜を摘んだり、狩りをしたりするために、出かけていく所であった。また、葬送が行われる所でもあった。ヤマ(山)は、ノのさらに外側にあり、平地よりも著しく高くそびえている所で、そこは、通常、人の立ち入らない所であった。神の降りてくる所であり、人を葬る所でもあった。そして、そこを越えると全く別の世界になってしまう境となる所であった。ヤマには木の伐採や狩猟の目的で入ることはあったが、人にとって事情のよくわからない所と意識されていた。

一方、ハラ(原)は一面に漠として広がった状態の地をいう語で、野にもハラはあるし、空や海にもある。アシハラ(葦原)・マツバラ(松原)のようにある植物が一面に広がっている所もハラと表現された。また、ヲカ(岡)は生活圏に比較的近いところにあり、ヤマと比較すると、ヤマより低いという高さだけが問題なのではなく、そのある場所も異なり、ヤマのように人々に縁遠い所ではなかった。

## 注

- (1) 柳田国男「地名の研究」『定本柳田国男集20』p.42, p.84. 筑摩書房
- (2) ノのつく地名は傾斜地だけでなく平地にも使われており、ノが特定の地形を意味したとは考えにくいということは次の文献でも指摘されている。  
 (ただし、いずれの文献においても白井のようにノを捉えていない)  
 吉田茂樹「古代の地名から見た『野』と『原』の諸問題」『東アジアの古代文化』16号所収 昭和53年7月(『地名の由来』に再掲 新人物往来社 昭和54年2月)  
 辻田昌三「『野』と『原』」『島大國文』9号所収 昭和55年8月(『古代語の意味領域』に再掲 和泉書院 昭和64年7月)
- (3) ハラはノに関連して論じられることが多かった。いままでの説で代表的なものは次のようなものである。
  - ①ハラには、特定の植物の生育する地・広々とした平地・陵墓などのある清浄な地、の三つの語源を異にする語があるとする説  
 吉田茂樹 前掲書
  - ②ハラ・ノ・ヤマの順に低地から高地になるという説  
 池田末則「『野』『原』考」『古代地名発掘』新人物往来社 昭和53年12月
  - ③ハラは「張る」の名詞形で気が充実する、充滿する所とする説  
 糸井通浩「〈原〉〈野〉語誌考・続貂」『愛文』15所収 昭和54年7月
  - ④ノは人間生活に近い地域で、ハラは人間の住みにくい地域とする説  
 辻田昌三 前掲書  
 (白井注—ハラを「張る」「晴る」と関連づけて考えることも可能かもしれないが、いまは語源に立ち入らない)
- (4) 松岡静夫『日本古語大辞典』(刀江書院 昭和12年)や、注2の吉田茂樹説など
- (5) 江戸時代に、官許の遊里(吉原)以外の私娼地をヲカバシヨ(岡場所)といったのは、ヲカ(岡)がサト(里)から外れた場所として捉えたうえでの命名と推測される。  
 (しらい きよこ 本学非常勤講師)